

乳幼児の養育責任の文化的多様性に関する一考察： 19世紀以降のオランダにおける家族観の変容に着目 して

福田，紗耶香
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻：博士課程

<https://doi.org/10.15017/7387319>

出版情報：国際教育文化研究. 18, pp.41-51, 2018-09-30. Comparative and International Education,
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



乳幼児の養育責任の文化的多様性に関する一考察

－ 19世紀以降のオランダにおける家族観の変容に着目して－

福田 紗耶香

はじめに

本稿は、乳幼児の養育役割の文脈依存性を整理した上で、オランダにおける家族観の19世紀以降の変容を、子育ての文化的多様性の中でどのように位置づけることができるのか考察するものである。

生物学者のポルトマン(Portmann, A.)が、人間の子どもの「生理的早産」であると指摘したように、乳幼児が生きていくために成人の保護と援助が必要不可欠である。人間の子どもは所属する社会の行動様式や生活習慣を学び、その社会の成員として、家族や遊び仲間、学校、職場など様々な集団において社会化されるが、その最も基礎的集団が家族とされてきた。現代では女性の就労増加に伴って、一日中保育所で年齢の近い子ども同士で過ごす子どもも増加している。特に先進諸国においては、多くの子どもが就学前に保育所や幼稚園のような施設に通うようになっており、いかに養育の一番の担い手としての母親役割から女性を開放するかが議論されている。

1998年の『厚生白書』の中で、三歳児神話には合理的な根拠がないという説が取り上げられたことで、日本においても三歳児神話に対する疑いがない信条に歯止めがかかった。近年では、子育ての在り方をめぐっては、「イクメン」や父親の育児休暇取得などが話題にあがるなど多様な在り方が現れているが、依然として働く母親、就労をあきらめた女性が抱える葛藤に関する記事は後を絶たない。

先進諸国の中で男女の労働参加率のギャップが小さいスウェーデンでも、男女の働き方には依然として差がある。男性は民間企業で働く人も多いが、女性の場合は公務員として働く人が圧倒的に多いなど、スウェーデン社会で子育てをするのに最適な働き方のパターンが現れていると言えるだろう。その他、オランダも男女の労働参加率のギャップは非常に小さいものの、フルタイムかパートタイムか、という指標で見ると、男性がフルタイムで働き、女性がパートタイム労働をしており、男女の働き方には大きな差があることが分かる。

女性の労働参加率の増加と子育てをめぐっては、先進諸国は同じ達成目標を共有しており、子育ての外部化が達成されるべきだという共通理解があるように思えるが、先進諸国の中でも

子育てに関する規範は、福祉制度、人口政策、労働環境、慣習など多様な要因によって異なっている。これまでエスピン・アンデルセンによって提示された福祉国家類型などによってある程度のグループ化がなされてきた (Esping-Andersen 1990, 1999 など)。しかしながら、Rogoff (2006) が主張するように、コミュニティの状況や伝統によって人間発達のゴールが異なり、それは制度、慣習、技術の中で一人前のメンバーとして機能するための学びが優先されるように設定されているとするならば、先進諸国の中でも可視化されにくい微妙な差異があるはずである。本稿は改めて先進諸国の中でどのような差異が見いだせるのかを問い直したいと考える。

本稿では、まず養育規範の一例として母性愛神話と三歳児神話についての定義を整理し (1 節)、次に養育役割のコミュニティごとのバリエーションを整理する (2 節)。そのうえで、オランダにおける 19 世紀以降の家族観がオランダ社会の文脈の中でどのように変化してきたのか分析する (3 節)。

1. 母性愛神話とは

母性愛がすべての女性が生得的にもつ本能ではない (Badinterr 1980) という主張がなされて 20 年以上経った。また、文化人類学における研究の成果によって、母親の子どもに対する無関心や選択的ネグレクトの事例が明らかにされ、社会的文脈を考慮した養育関係が模索されるようになってきている。

本節では、世界に広まることになった母性神話について、ある時代、あるコミュニティで必要とされた養育規範であると捉えて改めて整理する。母性愛神話についてよく整理されたものには大日向 (2006) がある。本節では、大日向 (2002, 2006) を参考にして母性愛神話の概要を整理する。

大日向 (2006) は、母性愛神話として語られるものを以下の四つの説によって類型化している。第一は、「産む能力イコール育てる能力説」 (大日向 2006, p.202) で、女性が生得的に母性を持つことを意味するものである。第二は「聖母説」 (同上) で、母性という言葉から慈愛や安らぎを想起させる説である。第三は、「母親イコール人間的成長説」 (同上) で、特に女性に対して、母親としての子育て経験が人間的に成長させる、という説である。第四が、「三歳児神話」 (同上) で、乳幼児にとって母親の愛情が不可欠で、母親が育児に専念しないと子どもに寂しい思いをさせ、将来に悪い影響を及ぼすという考え方である。

「三歳児神話」について、大日向 (2002, 2006) はさらに詳細にまとめている。大日向によれば、「三歳児神話」とは、通常「3 歳までは母親が子育てに専念すべきである」 (大日向 2006, p.204) という意味で使われており、その内容は、「①子どもの成長にとって幼少期が重要である、②この大切な時期は生みの母親が養育に専念しなければならない、なぜならお腹を痛めたわが子に対する母の愛情は子どもにとって最善だからである、③母親が就労等の理由で育児に専念しないと、将来子どもの発達に悪い影響を残す」 (大日向 2006, p.204) という三つから成り立つと説明している。

母性愛神話は、オランダにおいても 19 世紀以降広まった規範である。次節で母性愛神話が

普遍的な養育意識ではないことを確認したうえで、第3節でオランダにおける養育意識・形態の変容を分析する。

2. 養育役割の文化パターン

前節では、子どもの発達において母親が果たす役割が非常に重視されているパターンを示した。確かに世界中を見ても、母親が乳幼児の養育において中心的役割を担うことは多いが、子どもの発達に果たす家族やコミュニティの役割にはかなり大きな違いがある。Rogoffは、中国とメキシコで起こった人口変動と国家政策のダイナミクスの例を取り上げ、子どもの生存率と出生率に関する国家レベルの変化が、子どもを養育することにおける文化実践をも変容させると説明している。中国とメキシコの事例は同じコミュニティ内で起こった経年的変化を示しているが、横断的に見ても、養育の文化実践の違いとそのパターンが見えてくる。

本節では、Rogoff (2006) を参照して家族やコミュニティでの子育て方略について、コミュニティの経済状態などの環境、養育役割という二つの視点から整理する。

Rogoff (2006) によると、これまで人の発達についての研究が生活年齢と発達の達成がみられる年齢に注意を向けがちで、こうした生まれてからの年齢を、発達のものさしとして扱う考えは、年齢集団ごとの施設や制度によって確立されてきた。しかしながら、人の発達はより文脈依存적であり、人は自らの属するコミュニティの社会文化的活動への参加の過程で発達し、そのコミュニティもまた変容する。そこで、Rogoffは、人間の発達のゴールというものはコミュニティの状況や文化的伝統によってかなりの違いがあり、そのゴールは、コミュニティで一人前の人間として活動できるようになるための学びを優先するよう設定されていると主張する。したがって、それぞれのコミュニティで達成すべき発達項目というものが多様に存在しているのである。

まず、パターンがみられるものとして Rogoff が挙げるのは、「子どもの生存と養育」という課題に対するコミュニティの戦略である。ここでは、LeVine (1980) を引用しながら、コミュニティの状況によって異なる子育てのゴールを3つの層に分けて説明している。

第一に、子どもの身体的生存と健康の確保である。これは、乳児死亡率の高い地域で設定される子育てのゴールである。第二に、子どもが成長したときに経済的に自立できるようにすることが挙げられている。これは、まず子どもが生存できる見込みがたったうえで設定される目標である。第三は、名声、宗教的敬虔さ、教育達成、自己実現、などの価値を獲得するために子どもの潜在能力を引き出すことである。親たちは第一、第二の条件が満たされて初めて第三のゴールにエネルギーを注ぐことができるのである。したがって、乳児死亡率の高い地域では子どもをたくさん産むことや、生後2～3年の身体的世話を熱心に行うなどの方略が採用されることになる。一方で、乳児生存率が高く、子どもの将来の経済的自立の見通しも立っているようなコミュニティでは、少ない人数の子どもを産み、子どもの地位達成に高い期待をして、親は乳幼児期から子どもの教育に時間とエネルギーを注ぐのである (Rogoff 2006)。

次に、養育役割の視点から整理すると、他にどんな養育者がいるのか、またその人たちがど

んな役割を担うかというコミュニティの人間関係や伝統によってパターンが分かれてくる。養育の役割は必ずしも特定の誰かということとはできない。少なくとも家族、近所の人々、コミュニティの人々など、多様なバリエーションが考えられる。まず、拡大家族が近くにいるかどうかで子どもに対する養育役割は異なる。基本的に養育は母親が担うことは多いものの、身の回りの世話、遊び相手、社会化というような役割分担において、親が身体的世話と同時に遊び相手の役割も果たす場合や、遊び相手はきょうだいや拡大家族の誰かが担うパターンもある。次に、きょうだい子どもと関わることが多いようなコミュニティでは、きょうだいに子どもの世話が任されるパターンがある。さらに、コミュニティの複数の大人と一緒に乳児の世話をするような場合、養育役割は家族やご近所を超えて、コミュニティの人々へと広がっていくのである (Rogoff 2006)。

以上のことから、母性愛神話にみられるような母子関係は必ずしも普遍的なものではなく、一つの養育形態だと見なすことができる。

3. オランダにおける家族観の変容とチャイルドケアの普及

本節では、オランダにおける家族観の変容とそれにもなうチャイルドケア施設の普及について概観し、第2節で整理した Rogoff (2006) の養育役割の文化パターンに基づいて分析する。

オランダにおける家族観の変容を概観する上で、本節では、Raaijmakers(2013)による知見を参照し、チャイルドケアの変遷を整理する。Raaijmakers(2013)は、チャイルドケアに影響を与えてきた家族の論理、国家の論理、宗教の論理、市場の論理といった複数の社会的レベルの論理の視点から、これらの論理がどのように互いに作用し、オランダにおけるチャイルドケア分野の形成と発展の前提条件を形作ってきたのかを明らかにしている。およそ 1850 年から 2010 年までのオランダにおける家族とチャイルドケアに関する史料を集め、分析を行っている。また、歴史的資料だけでなく、政治的背景を分析するためのチャイルドケア政策に関する報告文書や、労働や家族パターン（例えば女性や母親の労働力参加率や離婚率、家計モデルなど）に関する記述統計などの二次データセットも用いて分析している。Raaijmakers(2013)の知見から、オランダにおけるチャイルドケアが家族や育児観の変容とともにどのように変化していったのかが分かる。表 1 は、Raaijmakers(2013)が歴史研究や歴史教科書で一般的に使用されている時代区分を使って、家族の論理の変容、家族内役割の変容、子育て観の変容とともにチャイルドケア組織の発展過程をまとめたものである Raaijmakers(2013)から一部抜粋して筆者が訳出したものを以下に示す。

	Era1 19世紀後期～第二次世界大戦	Era2 戦後（1945～1960年代半ば）
社会における核家族の位置づけ	・ 家族が社会の基本的集団で、婚姻がその中心的制度として存在。 ・ 家族の連帯が主張され、家族の規範と本質は教会と国家によって規定され、オピニオンリーダーの間でも広く共有されていた。 ・ 女性の就労を制限し、女性への補償を拡大することによってキリスト民主連立政権は男性稼得者モデルを固めた。	・ 家族が社会の基本的集団 ・ 安定し、まとまりのある家族は、第二次世界大戦後の社会を修復するのに従事した。 ・ 教会と国家は家族を、オランダ社会の基盤として強化した ・ また、寛大な福祉システムの発展は伝統的家族役割をさらに固定化した。 ・ 社会保障システムは男性に対しては失業に基づき、女性に対しては夫がいないことを基準として支給された。
経済システム	・ 男性稼得者モデルが支配的になる。	・ 男性稼得者モデルが支配的
家族内の役割分担	・ 分離したジェンダー役割が支配的 ・ 父親が家族の長で、家族の収入に責任をもつ。 ・ 妻と子どもは夫（父親）の権威に従うことが期待される。 ・ 女性は子どもの世話をすることと、家事をするべきとされる。	・ 高度に分離されたジェンダー役割が基準である。 ・ 父親が家計所得を稼ぎ、母親は、日中はいつでも対応できる状態で、夜は夫と子どものために働かなければならない。
教育的信念と育児に関する主流の仮説	・ 母性イデオロギが広がる：母親が家族の中心であり、自身の子どもの身体的、モラル、well-being に完全な責任を持つ。 ・ モラルの発達の子育ての主要な機能であり、子どもは権威に従うこと、親を尊敬すること、礼儀正しくあることを学ばなければならない。 ・ 母親は自身の子どもたちを甘やかしすぎるべきでなく、明白なガイドラインを示すべきである。	・ 母と子の絆がよい、健康的な子どもの発達にとって非常に重要であると考えられた。 ・ 子どもに関する専門家と女性誌によって広められた、フルタイムで手が空いていることと、母親としての責任が、より良い子どもの発達の前提条件として非常に重要だとみなされていた。 ・ 父親は幼い子どもに対して直接的に重要であるとはされなかったが、母親を情緒的に支え、家族のために経済的サポートを提供することが求められた。
チャイルドケア組織とその存在理由	① 修道女が貧困の子どもを、モラルの指導と宗教的教育を施しながら世話した。 ② プライベートのベビーシッティング（オランダ語で ‘matressenschooltjes’ と呼ばれる）。大都市のスラム街に約200施設近く存在していた。親族以外の見知らぬ女性が、貧困家庭の母親が働いている間子守をする。 ③ Day nurseries(オランダ語で ‘kinerbewaarplaatsen’ と呼ばれる)。必要に迫られて働く女性のため、チャリティ主体で創設された。The poor Actを通して、これらのイニシアチブは時に国家からの助成金を受けた。	① デイクア：チャイルドケアは不道徳なものとして概して受け入れられなかった。「よく発達した福祉国家の家族は、自らの子どもたちを家で世話するだけの余裕をもてるべきだ」と考えられた。デイクアのような施設は国家によって助成された緊急対策であり、必要に迫られて外で働かざるを得ない女性のために提供された。 ② Special social work nurseries：戦後一時的に存在したもので、戦後の社会修復を目的としていた。貧困地域に設置され、子どもと母親が社会化される施設である。

Era3 1960 年代半ば～1980 年代半ば	Era4 1980 年代後期～21 世紀初頭
・ 世俗化・個人化・解放の影響を受け、「権威」というものはもはや当然のものではなくなり、家族生活における重大な変化が起きる。 ・ 家族は社会においてより自立的集団になり、家族の問題はプライベートな問題とされるようになる。 ・ それまで典型的であった婚姻を基本とする家族のパターンが弱まっていく。 ・ 結婚は当たり前のことではなくなり、出産もより遅い年齢まで延期されるようになる。	・ 社会は個人の市場である。 ・ 自己実現と自立が高く評価される。 ・ 民主化と世俗化によって「柱状社会」が崩壊し、市場という言葉がその空白を埋めた。 ・ 国家は市場の自然作用を妨害することなく促進した。 ・ 自立、労働力参加、パートタイムチャイルドケアが理想的なバランスであるとして国家によってプロパガンダされた。
・ まだ男性稼得者モデルが支配的だが、夫婦共働き家庭も増加	・ 夫婦で 1.5 人分の収入モデルが支配的。 ・ 通常男性がフルタイム労働の一方、ほとんどの女性がパートタイム就労
・ 母親と主婦としての唯一の役割に不満を持つ女性がますます増え、フェミニストが伝統的役割パターンに異議申し立てをした。 ・ 特に高学歴の女性が出産後も労働市場に残る選択をする。 ・ しかしながら、男性の役割はそれに対応して変化することはほとんどなく、無給の労働においてもほとんど役割を果たしていない。	・ 家族の役割はかなり平等主義的となった。 ・ ほとんどの女性（と母親）がパートタイム労働で働いている。 ・ 男性は子育てにおいてよりおおきな役割を担うようになるが、無給労働を担っているのは多くの場合未だ女性である。
・ 子育ては、より子ども中心的になり、権威的ではなくなっていく。 ・ 子どもに厳格な服従は求められなくなり、子どもとのコミュニケーションがよいしつけの構成要素となっていく。 ・ 母親の役割はまだ固定的で、母親の就労は強く非難された。 ・ チャイルドケア議論の反対者は、フォーマルなチャイルドケアは母親の利己心でしかなく、子どもの福祉を危険にさらすと考えていた。	・ 最も重要な子育てアドバイスは、子どもの発達の促進とされるようになった。 ・ 母親だけでなく、父親役割がさらなる注目を集めていき、共同の子育てが両親と子どもの双方にとってよいと信じられている。 ・ 専門家によるチャイルドケアはより受け入れられるようになり、広く使われるようになっているが、オランダのセルフケアの観念は、オランダ人の「子どもにとって良いケア」のイメージに、未だ深く埋め込まれている。
① デイクア：就労時間のデイクアはまだ主として緊急対策としてみなされていた。しかし、デイクア組織の中には出産後も労働力として残りたい高学歴母親に利用を「許可」するものもあった。 ② プレイグループ：プレイグループはパートタイムのチャイルドケアを提供するものである（週に何時間か）。プレイグループは、子どもたちの社会化と発達に貢献するとして広く受け入れられた。 ③ 民間企業の Crèches:民間企業が自社における女性の雇用を継続させるために、自身のチャイルドケア施設を設立した。 ④ Day homes:小規模のプライベートチャイルドケアで、就労時間にチャイルドケアサービス提供者の自宅で行われる。	① デイクア、学校外ケア：国家によって助成されたチャイルドケアの組織で、雇用者との協力によって発達した。これらの組織は急激に増加し、チャイルドケア市場が発達した。チャイルドケア施設は共働きを可能にし、それが主要な正当化の理由となった。 ② プレイグループ：デイクア施設と対照的に、プレイグループは、女性の就労を刺激する機能がそれほどないため国家による助成金を受けなかったが、早期に学習障害の前兆を見出し、改善する機能があった。 ③ Day homes:新法が導入されてから急激に数が増加した。しかしながら、規制がより厳しくなると再び減少した。

表 1 オランダにおける家族観とチャイルドケアの変容

出所： Raaijmakers, 2013, p.39-42

Raaijmakers (2013) によれば、オランダにおいて母性愛神話が広まり、定着していったのは、

19 世紀後期から 1960 年代半ばごろまでである。オランダ社会の中で、核家族が社会の基本集団とされ、男性稼得者モデルが支配的になったことで、母親が子ども養育や教育の責任を担うとされていた。さらに、第二次世界大戦以降は、さらにジェンダー役割が分化され、母親と子の絆が子どもの健康的発達にとって非常に重要であるという信念が広まったという。この時期には専門家や女性誌によって、いつでも家族のために対応できるよう家庭外で働かず、母親としての責任を持つことが重要であるという考えが広まった。したがって、福祉国家の家族は自らの子どもを家庭で世話するだけの余裕をもつのが当然であるとして、チャイルドケア施設は不道德なものとして存在していたのである。

オランダの家族に大きな変化が起こり始めたのは Era3 であるといえるだろう。1960 年代半ばから 1980 年代には、避妊の導入などもあり、世俗化や個人化、解放の影響を受け、これまで当然視されていた家族という社会の基本単位が崩壊しつつあった時代であり、女性の労働市場への参加が徐々に増えていった時代であるといえる。Era4 は現代のオランダを特徴づける変化が起こった時代であるといえるだろう。1980 年代から 21 世紀初頭のこの時期は、市場の論理が主流となり、市民の働き方も大きく変容した時期である。国家が積極的に雇用を促進し、夫婦共働きで 1.5 人分の収入を得るという家計モデルが確立していく。家族内での役割はかなり平等になったとはいえ、フルタイムで働くのは多くの場合男性であり、女性はパートタイム労働で家庭における無給の労働を担うのは多くの場合女性のままである。

教育的信条・子育て観は、母親が子どもの身体、モラル、well-being の発達に責任を持つものとされ、権威に従うよう厳格な教育が求められていた Era1 と Era2 から、徐々に子ども中心主義的思想に移り変わり、Era4 においてようやく子育てにおける父親の役割が注目されるようになった。しかしながら、21 世紀に入ってチャイルドケアが広く利用されるようになって、いまだに親自身によるチャイルドケア信仰は深く根付いているようである。

では、このような社会の変容に伴って変遷を遂げてきたオランダのチャイルドケア整備にはどのような特徴があるだろうか。OECD(2000)でも指摘されているように、オランダのチャイルドケアの始まりには、貧困家庭の子どもに対するキリスト教的道徳によるケア、教育が大きく関わっていた。Era1 においては、いずれのチャイルドケア組織も貧困家庭の子どもや必要に迫られて働く母親の支援といった目的をもっており、その意味では福祉的要素が強く表れていた。戦後においても、チャイルドケア施設に子どもを預けるということは不道德であると考えられ、よく発達した福祉国家においては自分の子どもを家で世話するだけの余裕があるべきである、という価値観が広まっており、チャイルドケア施設に預けざるを得ない状況は逸脱した家庭のやることとみなされていた。現在の全日保育所に近いデイケアとプレイグループが登場し始めたのは 1960 年代半ば～1980 年代半ばの Era3 である。デイケアの方はまだ緊急措置としてみなされていたものの、プレイグループが子どもの社会化と発達機会提供の場として期待されたことは注目に値する。これまで家庭の中でドメスティックに行われてきた子育て・しつけが家の外にでてもいいという考えが広がってきた現象であるといえる。1980 年代後期から 21 世紀初頭にかけての Era4 では、法整備によってチャイルドケアが正当化され、チャイルドケアの市場化も発達した。

オランダ社会における家族は教会と国家による近代家族の確立から個人化を遂げ、他の北ヨーロッパ諸国と同様により多様な家族形態が一般的になってきている。チャイルドケアの変遷に着目すると、貧困救済を根拠にキリスト教的道徳を教えている時代も見られ、一貫してある標準的家族から逸脱した家庭の子どものための設備とみなされていたことがわかる。法整備も整い、チャイルドケアがユニバーサルに提供されるようになった Era4 においても、パートタイムで働くことで子育てをいくらか親自身が行うという選択をしていることはオランダの特徴として特筆すべき点であろう。

チャイルドケア整備の変容について時代ごとの特徴は、Era1 においては、キリスト教の影響を色濃く受けた貧困救済的サービスで、まだネガティブなイメージであったと言える。それでも国家は貧困対策として助成している。Era2 においては、オランダにおいても近代家族の概念が定着した時期であり、男性が家計を支え、母親としての女性が家事と育児に責任を持つ、という家族像が固定化されたため、余計にチャイルドケアが不道德なものというイメージがついた時代である。チャイルドケアを利用するということは、より一層ネガティブなイメージになった時代であると言えるだろう。この時期も同じく国家によって貧困対策としての助成が行われている。Era3 は、転換期である。デイケアの利用はまだ緊急措置であることには変わりはないが、高学歴の母親が出産後も働くために利用する例も出てきた。さらに、これまでは子どもの養護を主要な機能としていたチャイルドケアの中に、子どもの社会化と発達を促進する目的の施設が登場したことによって、チャイルドケアの利用の可能性がよりユニバーサルな範囲に広がり始めた時代である。Era4 は、第二の近代と呼ぶにふさわしい時代であり、チャイルドケア制度は国家によって法制化されたことで以前の逸脱した支援が必要な家庭のためのものというイメージから脱却し、誰もが利用できるものとして正当化された時期であると言える。国家の規制緩和や地方分権によってチャイルドケアも市場化されたことも特徴であり、チャイルドケア施設が急増した。しかしながら、ワークシェアリングの成功が逆の効果をもたらしたか、国家は女性のフルタイム就労率増加を目指しながらも、男性がフルタイム、女性がパートタイムで働きながら、部分的にチャイルドケアを利用し、部分的には自ら子どものケアを行うというオランダ独自のチャイルドケア利用の選択肢が確立している。

ここで、Rogoff(2006)で見られた養育戦略、養育役割に影響を与える環境要因の視点からオランダの家族観の変容について分析する。

図2は、オランダの乳幼児の死亡率と合計特殊出生率の1800年から2018年までの変遷を表したものである。この図では、1800年以降、今日に至るまでに乳幼児の死亡率と合計特殊出生率には負の相関がありそうであることが予測される。

Rogoff (2006) で提示された通り、19世紀から20世紀にかけては子どもの生存は現在ほど確かなものではなく、特に母親がそばにいて子どもの世話にエネルギーを注ぐことが必要とされたのが19世紀後期から戦後までのオランダに見られる養育形態として現れているといえる。さらに寛大な福祉システムで家族単位での生活がある程度保証された戦後は、男性が外で働き、女性が家庭で子どもの世話をする伝統的なジェンダー役割分担がさらに固定化されている。

戦後はさらによりよい子どもの発達のため、母子関係の良好さが重要であることが強調され

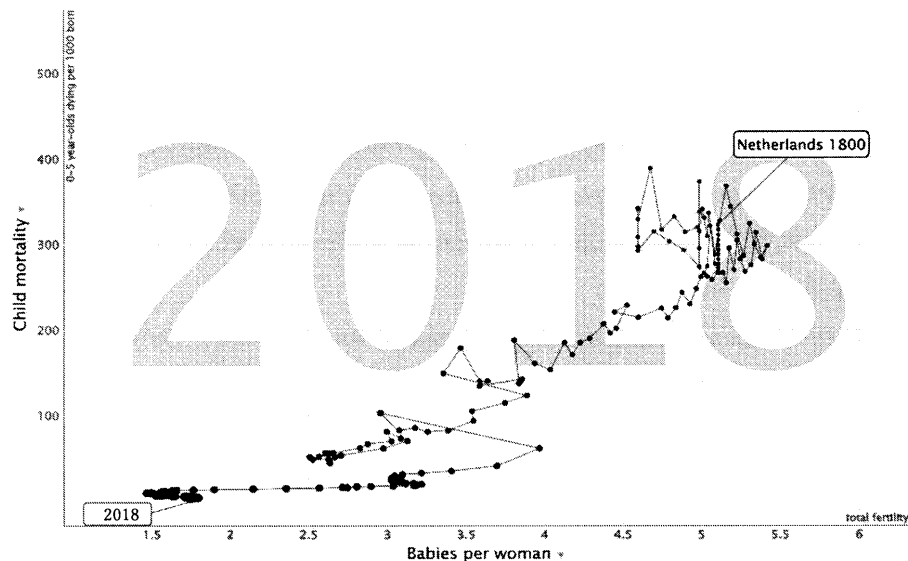


図2 1800年から2018年までのオランダにおける乳幼児の死亡率と合計特殊出生率の変化
出典：Gapminder(www.gapminder.org/data/)

始めていることに関しては、オランダ社会での乳幼児死亡率の低下及び経済的安定がこうした育児意識を広めることになったと考えられる。現代に至っては、Rogoff (2006) で挙げられていた子育てのゴールの第三番目である、子どもの潜在能力をさらに引き出し、さらなる自己実現、地位達成に向けた支援というものに親のエネルギーは注がれていることが見て取れる。

最後に、養育役割分担に関しては、19世紀当初から核家族が前提となっていたため、母親が主に養育及び教育役割を担うことになったと考えられる。しかしながら、オランダでは祖父母が近所に住んでいることも多いうえ、教会のコミュニティも強かったと考えられるため、こうした拡大家族やきょうだい、近所の人々、その他コミュニティの人々がどのように育児に関わっており、現在ではどのように変化してきているのかは本稿で扱った参考文献からは読み取ることができない。

おわりに

本稿は、乳幼児の養育役割の多様性を整理した上で、オランダにおける家族観の19世紀以降の変容のプロセスをコミュニティの文脈を考慮しながら考察した。オランダでも1960年代まで主流であった母性愛神話は、乳幼児の死亡率の低下、福祉サービスの充実とともに固定化されたジェンダー役割分担を背景として根付いたことが考察された。

しかしながら、母親以外の養育に関わってきた人々の存在は本稿では考察することができなかった。今後は拡大家族、きょうだい、家族以外のコミュニティメンバー、子育ての専門家としての教師がどのように乳幼児の養育役割を分担し、現在のオランダ社会ではどのような子どもの発達のゴールが設定されているのかをさらに明らかにしていく必要があると考える。

参照文献

- Badinterr, E. 1980. *L'Amour en plus: histoire de l'amour maternel (XVIIe-XXe siècle)*. Flammarion (鈴木 晶訳, 『母性という神話』, ちくま学芸文庫, 1998 年)
- Esping-Andersen, G. 1990. *The Three Worlds of Welfare Capitalism*. Polity Press(岡沢 憲芙・宮本太郎監訳 『福祉資本主義の三つの世界——比較福祉国家の理論と動態』 ミネルヴァ書房, 2001 年).
- Esping-Andersen, G. 1999. *Social Foundations of Postindustrial Economies*. Oxford University Press(渡辺雅男・渡辺景子訳 『ポスト工業経済の社会的基礎——市場・福祉国家・家族の政治経済学』 桜井書店, 2001 年).
- Levine, R. A. 1980. A cross-cultural perspective on parenting. In M. D. Fantini, & R. Cardenas (Eds.), *Parenting in a multicultural society*. New York: Longman.
- OECD. 2000. *Early Childhood Education and Care Policy in the Netherlands*. The Hague: Ministry of Health, Welfare & Sport.
- Raaijmakers, A. G. M. 2013. *Take care! Responding to institutional complexity in Dutch childcare*. Ridderkerk: Ridderprint.
- Rogoff, B. 2003. *The Cultural Nature of Human Development*. Oxford University Press (當眞千賀子訳 『文化的営みとしての発達: 個人、世代、コミュニティ』 新曜社, 2006 年) .
- 大日向雅美. 2002. 『母性愛神話とのたたかい』 草土文化.
- 大日向雅美. 2006. 「母性愛神話・3 歳児神話をどう見るか」, 広田照幸編著 『子育て・しつけ』 (リーディングス日本の教育と社会 第3 巻) pp.201-211, 日本図書センター.

A study on the cultural diversity of preschool child-rearing responsibilities

Sayaka Fukuda

This paper aims to examine the division of child-rearing duties depending on community context. It investigates the transformation of perspective on child-rearing in the Netherlands since the 19th century.

To analyze the change of child-rearing style in the Netherlands, taking in consideration the social context, I used the concepts of 'The Maternal Myth' and various pattern of child-rearing as described in *The Cultural Nature of Human Development* written by Rogoff, B in 2003.

Findings of this research are as follows. First, the effect described in 'The Maternal Myth' can be observed in the Netherlands from 19th century to 1960s. Based on the framework of Rogoff's theory, it can be expected that the Maternal Myth spreaded in the context of decrease of child mortality and generous welfare system, and established gender role on rearing children.

However, this paper has limitations on consideration of existence of reares such as grandparents, siblings, neighborhoods, and other community members in the Netherlands. Further research should be conducted to find out who and how people have played their role regarding child-rearing in Dutch society. And what development goals have been set in Dutch society should be explained in further research.